

〈研究ノート〉

琵琶湖文化館の建設費協力箱について

田澤 梓

昭和三十六年（一九六一）に開館した当館は、建設費一億五千万円のうちのおよそ三分の二という、非常に多くの寄付を得て建設された。この寄付を偲ぶことができるものとして、本館一階エントランス付近に設置された寄付銘板をはじめとする品があるが、「琵琶湖文化館建設費協力箱」（以下、「当館募金箱」と記す）もそのうちの一つであろう。

当館募金箱については、令和七年（二〇二五）二月十一日に開催した「新しい琵琶湖文化館に関する県民フォーラムⅣ」にて展示し、あわせてフォーラム参加者が実際に当館募金箱に寄付金を入れていただくことができるという機会を設けた⁽¹⁾。これにあたって、当館募金箱について紹介し、また寄付活動への理解を深める一助としたいと思ったことが本稿執筆の動機である。

本稿では、まず当館募金箱についての基本情報と、設置された滋賀会館について紹介する。つぎに、日本における募金および寄付活動を概観するとともに、このなかで用いられてきた募金箱の事例をあげつつ、その形態を三つに分類する。昭和期には募金および寄付活動が多様化・活発化していたが、そのなかに琵琶湖文化館の活動を位置付けたい。さらには、令和の当館への寄付活動への理解を得ることにつながられることができたら幸いである。

当館募金箱の概要

琵琶湖文化館の建設費協力箱（図1）

総高一〇六・五、幅三七・〇（単位はセンチメートル）

木製で全体にペンキが塗られた箱。断面が一辺三七センチメートルの正三角形の三角柱をなし、上部の奥側には三角柱を横向きに置いた形の作り出しを取り付ける。また天面には幅八センチメートルの孔が開けられ、ここに金銭を入れることができるようになっていく（図2）。色はやや褐色がかかった桃色で、下部の棧はえんじ色を呈する。背面と見られる面には、薄く白色のペンキが塗られており、下部には金銭を取り出せる小さな口が開けられ、蓋が取り付けられている。



図1 琵琶湖文化館の建設費協力箱



図2 当館募金箱の上部

当館募金箱には、赤と黒の二色を組み合わせて、この箱に入れられる協力金の用途が明記されている。側面には左右二箇所に縦書きで「三月二〇日開館／琵琶湖文化館の／（展望閣 博物館 美術館 水族館 プール）／建設に皆様のご協力をお願いします」、上部の作り出しには横書きで「3月20日開館／琵琶湖文化館／建設協力箱」と記される。

これと同じものが合計四点あり、令和五年（二〇二三）ごろまで当館五階の屋根裏部屋に保管されていたが、近年これらを取り出して、新しい琵琶湖文化館への機運醸成を図るために活用することとした。

滋賀会館と当時の設置状況

これら当館募金箱は、かつて滋賀県庁舎のほど近くにあった滋賀県立滋賀会館（大津市京町三丁目四一―二一、現在のNHK大津放送局の場所に位置する）内に設置されていた（図3）。

滋賀会館は昭和二十九年（一九五四）六月に開館した、地上五階、地下一階の鉄骨鉄筋コンクリート造の建物で、当時の大津地域の文化・経済の拠点といえる施設であった。すなわち、当館の前身である滋賀県立産業文化館^①のほか、収容定員一四〇八名の大ホール^②や、多目的ホールの中ホール、県立図書館、ホテル、結婚式場、様々な専門店が並ぶ地下街、農協関連の各事務室、貸事務所などが設けられ、また地下は県庁舎とつながっていた。人々が集う場所でも、映画事業では最も多い年で年間二十六万人（昭和三十年）、図書館には十二万人（昭和三十三年）が訪れ^③、また地下街には多くの人が行き交い活気があったという。

当時の滋賀会館の館長は、産業文化館の初代館長であり、のちの琵琶湖文化館初代館長でもある草野文男（一九〇六―一九八五）であった。

草野は昭和三十一年三月まで滋賀会館と産業文化館の館長を兼任していたが、昭和三十一年四月に滋賀県立短期大学事務部長に転出、昭和三十四年二月に滋賀会館と産業文化館に再着任すると、琵琶湖文化館建設の構想を描き、建設費協力を集める活動の中心を担った。対象も手法も様々なメニューを設けて寄付を募った草野は、今でいうところのファンドレイザーであった。

草野により設置された当館募金箱は、昭和三十四年六月五日から昭和三十六年三月までの一年十箇月の間、協力金を受け入れ、合計で七〇五〇円募金された^④。琵琶湖文化館建設への寄付金は最終的には一億円以上となったため^⑤、総額からすると当館募金箱への寄付はごく少額といえる。なお草野は、当館募金箱について「もともとはあまり入れてくれませんがね。（笑）」^⑥と語っており、当時から当館募金箱への寄付は少ないと認識されていた。

さて、滋賀会館に設置された当館募金箱は、南玄関、ロビー、大ホール改札所、産業文化館の四箇所に置かれた。『琵琶湖文化館創建記念誌』では設置場所ごとに月別で受け入れ金額を整理しており、これをグラフとすると図4の棒グラフのとおりである。設置された月は、いずれの箇所も金額が大きく、当館募金箱を設置するというニュースもあつたと見られ、当初は話題性があつたと考えられる。金額



図3 県立滋賀会館全景
（『滋賀会館20年誌』（1974年）より転載）

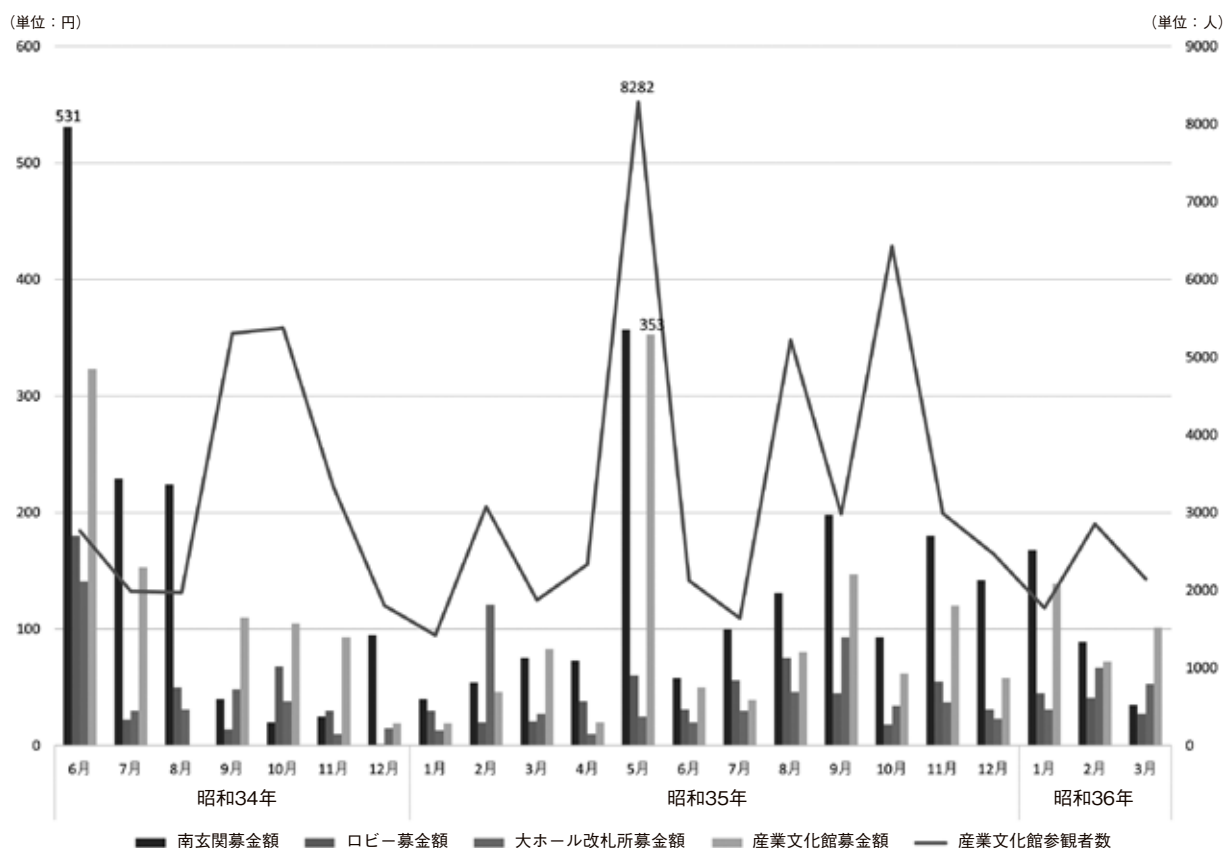


図4 設置場所別の募金額および産業文化館参観者数



図5 当館募金箱（南玄関）



図6 当館募金箱（大ホールロビー）

の多い設置場所は人通りの多い南玄関で、次に多いのが三階の産業文化館であった。三階に位置しているものの、産業文化館の狭隘から琵琶湖文化館の設置が強く求められていたこともあり、その要望を反映する金額になったと考えられる。なお産業文化館は最初の月以外は折れ線グラフで示した参観者数とおおむね相関があった。

なお当時は、昭和二十八年に銭単位の貨幣の流通が停止、昭和三十年から現在のアルミニウムの一円貨幣の流通が始まったところで、当館募金箱に入れられた金種は一円単位が多かったと予想される。

当館の古写真に、当館募金箱を写したものが二枚ある。いずれも昭和三十五年十月に撮影された写真で、図5は南玄関の壁際に設置されたものと思われる（八）。三角柱の特徴的な形の募金箱であるが、円柱に沿って設置されても、省スペースでかつ視認性が高い作りになっているといえる。

ところで、昭和三十五年の写真に写る当館募金箱は、側面に「明春二月完成」と記されており、今ある「三月二〇日開館」と書かれたものとは文字が異なる。現在の当館募金箱を注視すると、「三月二〇日開館」の部分はペンキの色がわずかながら異なり、塗りつぶされたようになっていて文字が書かれていることが分かる。開館日が決定すると書き換えられたことが想像され、昭和三十四年の設置当初から開館日の記載を都度更新しながら使用されたようである。

募金・寄付行為と様々な募金箱

前節までで当館募金箱について紹介したが、ここで一般的な募金箱の形態を、募金・寄付行為の変遷とともに確認することとしたい。

現在のような募金（金銭を募ること）および寄付（金品を贈ること）の活動は、もとは日本にはなく近代以降に欧米からもたらされたと考えられるむきもあるが、そもそも古くから日本においては、募金行為は勧進（寺や仏像の建立、修理などのために広く人々に善根功德になると勧めて金品の寄付を募ること。または出家姿で物をもらって歩くこと）、また寄付行為は寄進（神社や寺院に、金銭や物品を寄付すること）として、浸透していたともいえる。ただし信仰に基づくという大きな違いがある。その背景が全く異なることを念頭に置きながらも、不特定多数からの金銭を集めることを目的とし、いったん金品を入れたら容易には取り出すことのできない箱としては、杜寺の賽銭箱が思いつく。賽銭箱に関する先行研究には、古くは柳田国男『日本の祭』¹⁹の「参詣と参拜」があり、賽銭箱は氏子以外の他所から参詣した人のために設置されたことに始まるという。奉るものは金銭だけではなく、紙に洗米を包んだ「オヒネリ」や、布帛とみられる「ヌサ」もあった。

賽銭箱の成立時期については不明な点が多いが、賽銭箱らしき箱が絵画作品に描かれることは鎌倉時代からあり、神奈川県・清浄光寺（遊行

寺）の国宝・一遍聖絵では、弘安二年（一二七九）に描かれた第四巻第四段において、因幡堂の広縁中央に、長方形で四本の脚がついた賽銭箱らしきものが描かれている²⁰。以降、近世に至ると多くの社寺において賽銭箱が設置され、貨幣経済の庶民社会への浸透とともに、賽銭行為は一般的なものとなったとみられる。

さて明治期に至ると、近代化により国家の社会構造も大きく変化するなかで、慈善活動という新しい社会的動向が現れた。慈善事業家・社会事業家たちは社会問題に対する意識を高め、寄付を通じて社会の福祉向上を目指した。さらには実業家による慈善事業も行われ、特に渋沢栄一は多くの企業の設立に際し寄付を募るとともに、自ら多額の寄付もした。また、明治・大正期には、国民による全国的な寄付の取り組みも徐々に増加した。例えば明治神宮外苑の造営に際して行われた寄付活動が挙げられるが、これは国家的規模の事業でありながら、広範な国民の支持と寄付によって支えられたといえる。

寄付による博物館建設も明治期からみられる。現在の東京国立博物館の表慶館は、二万四千人近くの賛同者を集めて明治三十四年（一九〇二）に着工、七年かけ建設され²¹、また日本の公立美術館として最も古い東京都美術館は実業家による寄付によって大正十五年（一九二六）に建設された²²。ほか、昭和六年（一九三一）に開館した大阪城天守閣も建設費全額が寄付によるもので²³、当時の人々の歴史や文化への関心の高さがうかがえる。

さらに戦後の復興期には、より多様な募金・寄付活動が見られるようになった。戦後すぐの昭和二十二年に厚生省（現在の厚生労働省）が提唱した「国民たすけあい運動」（現在の赤い羽根共同募金）をはじめ、社会福祉事業を支援するための資金が広く募られた。さらに、昭和三十一年の東京オリンピック開催に向けても活発な寄付活動が行われ、整備や運営が支えられた。

戦後の多様な募金活動のなかで見られる募金箱は、大きさは様々である。例えば赤い羽根共同募金は小型で手に持つことができる。持ち運びが容易で駅前等の人の集まる場所で募金活動を行うことに適した形状で(図7)、現在の募金活動でも一般的な形態である。

赤い羽根共同募金と同時期に始まったが数年限りであった日本赤十字社の白い羽根共同募金の箱は、対照的に大型で置き型のものがあつたようである。人の行き交う橋上に「無人スタンド」と書かれた募金箱が設置された(二四)。

こうした大型の置き型の募金箱の例は、東京都渋谷区の忠犬ハチ公再建のための募金箱(二五)や、東京オリリンピックへの募金箱(二六)等の存在を新聞社の写真アーカイブで確認することができる。多くは当館の募金箱と同様、大人の腰高程度の大きさ、手作り風の木製とみられるもので、資金が必要なプロジェクトごとに作成されたと考えられる。

これとは逆に、常設の募金箱として昭和後半に設置され、現在まで利用されているものもある。昭和五十七年に新橋ライオンズクラブ二十五周年を記念して設置された、ライオンの像をとまなう募金箱は、人通りの多い新橋駅前SL広場に設けられている。



図7 第1回共同募金(赤い羽根共同募金)のポスター(昭和22年)昭館提供



図8 東京国立博物館平成館に設置された募金箱
(撮影:令和7年1月)
寄付を呼びかけるメッセージが大きく記され、右側に透明なアクリル製の募金箱がある

大型の置き型の募金箱は令和にも多くあるが、現在は透明なアクリル製で内部が見えるものが多い(近年は募金箱の大きさを問わず中身が見えるものが多い)。博物館にも近年設置されたとみられる募金箱があるが、多くは中身が見え、どのくらい募金が集まっているか、どんな金種が多いかなどが直感的に分かる仕組みとなっている(図8)。

このほか、置き型ではあるが小さな募金箱も、昭和期から現在までみることができる。当館募金箱と同時期のものとしては、浜松城をかたどった陶製の「浜松城再建募金箱」(二七)があり、募金箱の形が用途を直接的に表している。

以上、かなり雑然と募金箱の例をあげてきたが、昭和期以降の募金箱を大きさと設置方法から判断すると、次の三類型に整理できる。

- ①大型の置き型(屋内外の床面・路面に設置される)
- ②小型の置き型(机上などに設置される)
- ③手持ち型(街頭で募金を呼びかける際などに使用される)

このうち当館募金箱は、①大型の置き型に分類される。また、背景は異なるものの、この分類だけを考えると賽銭箱は①大型の置き型に通じるものがあるかもしれない。

おわりに

本稿では、当館募金箱と昭和三十四年（一九五九）からの滋賀会館での設置について概観した。また、昭和期の寄付活動について紹介するなかで、その高まりを確認しつつ、当館と同じ大型の置き型の募金箱を紹介し分類したところ、賽銭箱に通じる系譜を思わせる結果となった。

明治期以降の博物館施設建設への寄付活動と、昭和期の寄付活動の高まり、そしてファンドライザー・草野文男の尽力により、当館の建設には総額で一億円という多額の寄付が寄せられた。多くの人が訪れる滋賀会館に設置された当館募金箱の広報効果は高かったと考えられるが、その金額は寄付金の総額からすると少ないものであった。

しかし、当館募金箱にお金を入れていただいた人はみな、滋賀会館の次に誕生する大津地域の県立文化施設・琵琶湖文化館への、大きな期待をもって寄付をしたにちがいない。当館学芸員の筆者としては、六十六年前に寄付をしていた多くの人の思いを未来につなげるためにも、新しい琵琶湖文化館の計画を着実に進めていきたい。

現在、滋賀県では、新しい琵琶湖文化館のために寄付を呼びかけており、日々各方面からご寄付をいただいている。心より感謝申し上げます、皆様からの寄付金は大切に使用させていただくとともに、本稿から垣間見えるような長い歴史の一部となると、思いを馳せていただけたら幸いである。

（たざわ あずさ・滋賀県立琵琶湖文化館主任学芸員）

註

- (一) 三十四人の参加者から五三、〇二一円ものご寄付をいただいた。
- (二) 産業文化館および琵琶湖文化館の創建については、井上ひろみ「滋賀県における地域博物館史の一事例―滋賀県立産業文化館から滋賀県立琵琶湖文化館へ―」（琵琶湖文化館『研究紀要』第二十三号）が詳しい。
- (三) 『滋賀会館記念誌』一九五四年
- (四) 『滋賀会館五年誌』一九五九年
- (五) 『琵琶湖文化館創建記念誌』一九六一年
- (六) 昭和三十四年の計画時には、建設資金一億五千万円のうち寄付金は五千万円を目標とし、最終的には寄付金九千万円、県費六千万円として県議会で議決された。実際には、現金の扱いとしては九八、四七二、九五六円、物品を入れると一〇〇、九五七、〇五六円もの寄付が集まった。
- (七) 朝日新聞、昭和三十四年九月十七日
- (八) 当館井上優副館長にご教示いただいた。
- (九) 弘文堂書房、一九四二年。なお角川ソフィア文庫版（二〇一三年）を参照した。
- (一〇) 絵画から見る賽銭箱については、増子保志「行為」としての賽銭」（日本国際情報学会誌『Kokusai-Joho』七巻一号、二〇二二）が詳しい。
- (一一) 東京国立博物館ホームページ「館の歴史」
- (一二) 東京都美術館「東京都美術館生みの親 佐藤慶太郎」二〇一二年
- (一三) 『大阪城物語』国勢協会、一九三二年
- (一四) 毎日フォトバンク「白い羽根募金 募金箱を備えた無人スタンド」、撮影日：一九五三年五月、撮影場所：東京・教寄屋橋
- (一五) 毎日フォトバンク「忠犬ハチ公再建のための渋谷駅前の募金箱」撮影日：一九四七年六月、撮影場所：東京・渋谷駅前
- (一六) 朝日新聞フォトアーカイブ「第四十四回大会 外野席入口に設置された「オリンピック募金箱」」撮影日：一九六二年八月十二日、撮影場所：大阪・阪神甲子園球場
- (一七) 浜松市博物館「浜松城 築城から現代へ」展覧会図録、二〇二〇年

滋賀県立琵琶湖文化館

研究紀要 第四十一号

発行 令和七年三月

編集発行 滋賀県立琵琶湖文化館

印刷 大津紙業写真印刷株式会社